

# 病害虫防除指導報

安心のネットワーク

**NOSAI**

第369号

令和5年4月20日

発行

秋田県農業共済組合  
北秋田山本支所

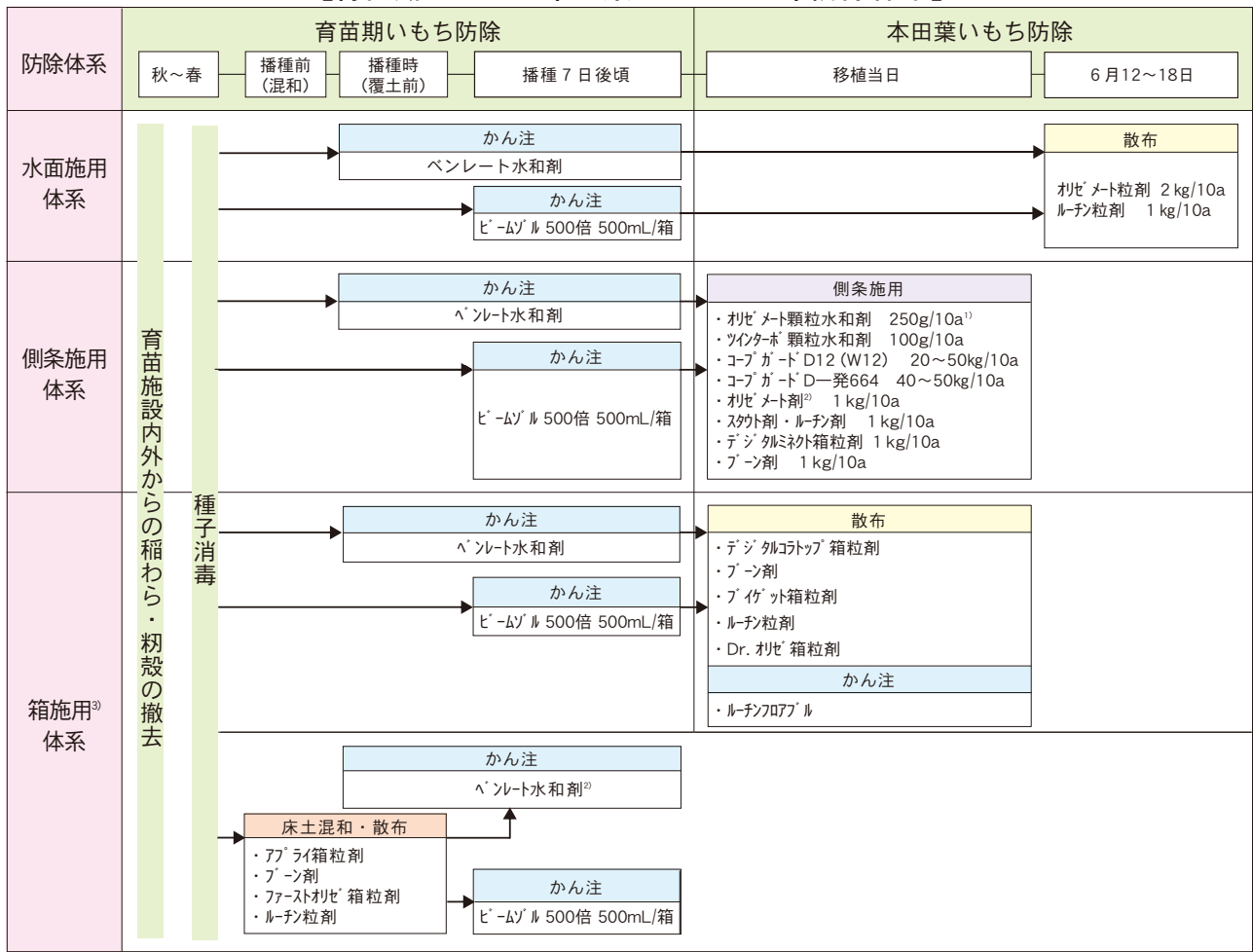
☎0185-54-5540

## 1 育苗期～移植時のいもち病防除について

### (1) 育苗期～本田のいもち病基本防除体系

穂いもちの被害を未然に防ぐために、下記に示す防除を体系的に行いましょう。

#### 【育苗期いもち・本田葉いもちの基本防除体系】



1) フェルテラ剤との混合剤である側条オリゼメートフェルテラ顆粒水和剤の使用量は500g/10aです。

2) アプライ箱粒剤、ブーン箱粒剤、ファーストオリゼ箱粒剤、ルーチン粒剤とベンレート水和剤は、播種時に同時に施用できます。

※薬剤によって使用時期が異なるので注意してください。

### (2) 育苗期のいもち病防除

苗いもちと苗に発生する葉いもちは、いもち病の早期発生、多発の要因となるため必ず育苗期いもち病防除を行いましょう。

#### 【育苗期いもち防除剤】

農薬名	農薬の種類	箱当たり散布量	備考
ベンレート水和剤	ベノミル水和剤	500倍液 500ml 1,000倍液 1L	かん注
ビームゾル	トリシクラゾール水和剤	500倍液 500ml	かん注

### (3) 本田のいもち病防除

いもち病の本田防除剤には育苗箱施用剤、側条施用剤、水面施用剤があるのでいずれかを選択します。県内でQoI剤(RACコード11)に対する耐性菌が確認されているため、嵐剤、アミスター剤、イモチエース剤、オリブライト剤等とその混合剤は使用しないでください。

農薬名		使用時期	箱当たり散布量 [散布液量]
箱施用剤	アプライ箱粒剤	床土混和又は播種時(覆土前)	50g
	デジタルコラトップ箱粒剤	移植3日前～移植当日	50g
	ブーン箱粒剤	床土混和又は播種時(覆土前)～移植当日	50g
	ファーストオリゼ箱粒剤	床土混和又は播種時(覆土前)	25～50g
	ブイゲット箱粒剤	緑化期～移植当日	50g
	ルーチンフロアブル	移植3日前～移植当日	100倍液 [500mL]
	ルーチン粒剤	床土混和又は播種時(覆土前)～移植当日	25～50g
	Dr.オリゼ箱粒剤	移植3日前～移植当日	25～50g
側条施用剤	オリゼメート顆粒水和剤	移植時	250g/10a
	側条オリゼメートフェルテラ顆粒水和剤		500g/10a
	ツインターボ顆粒水和剤		100g/10a
	コープガードD12		20～50kg/10a
	コープガードW12		40～50kg/10a
	コープガードD-発664		
	オリゼメート粒剤20		
	スタウトダントツ箱粒剤		
	スタウトパディート箱粒剤		
	ルーチンデュオ箱粒剤		
	ルーチンパンチ箱粒剤		
	デジタルミネクト箱粒剤		
	箱大臣粒剤		
	ブーンパディート箱粒剤		
	Dr.オリゼパディート粒剤		
Dr.オリゼフェルテラ粒剤			
Dr.オリゼリディア粒剤			
水面施用剤	オリゼメート粒剤	6月15日頃(6/12～18)	2kg/10a
	ルーチン粒剤		1kg/10a

### (4) 薬剤散布時の注意点

#### ①箱施用剤による防除の注意点

- ア. ポット用育苗箱では使用しないでください。
- イ. 箱当たり散布量が25gとして使用可能なのは、10a当たりの使用育苗箱が20箱以上の場合です。
- ウ. 高密度播種は、育苗箱(30×60×3cm、使用土壌約5L)1箱当りに乾粉として200～300g程度播種する場合とし、薬剤の処理時期は移植3日前～移植当日です。
- エ. 復元田等では土壌の窒素供給量が多くなり、稲体のいもち病に対する抵抗性が低下するおそれがあります。このような場合は箱当たり散布量は50gです。
- オ. アプライ箱粒剤、ファーストオリゼ箱粒剤、ブーン箱粒剤又はルーチン粒剤はベンレート水和剤と播種時に同時に利用できます。

#### ②側条施用剤による防除の注意点


- ア. ペースト肥料用側条施用剤は、ペースト肥料との混和が悪いと効果が劣るので、別容器(タンク等)に肥料と農薬(同重量の水に溶かしてから)を入れて十分攪拌してから使用します。調合は移植当日に行い、調合したものはその日のうちに使用しましょう。施肥深度が3～7cmの側条施用又は2段施用で使用してください。移植の際、土壌が硬く、施肥溝がふさがらない時は防除効果の劣る場合があります。
- イ. スタウトダントツ箱粒剤、スタウトパディート箱粒剤/ルーチンデュオ箱粒剤/ルーチンパンチ箱粒剤及び箱大臣粒剤は推奨しない施薬機があるので使用前に確認します。

#### ③水面施用剤による防除の注意点

- ア. 湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入水しないでください。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しはしないようにしましょう。
- イ. かけ流し田では効果が低下します。

### (5) その他の留意点

- ア. 育苗期間に1個でも病斑が認められた場合は、同一育苗施設の苗は移植しないようにしましょう。
- イ. 余り苗は発病しやすく伝染源になりやすいので、放置せず直ちに泥に埋めて処分しましょう。



## 農薬の処分方法について

- ・農薬は使い残しが生じないように使用量にあわせて調製・散布します。使い残した農薬は、散布むらの調整などに利用します。
- ・使用後の噴霧機やタンク、ホース、ノズル等の散布器具は洗い残しのないようにしっかりと洗浄します。洗浄液は排水路や河川等に流出することのないように適切に処理します。
- ・使用済み空容器の中に農薬が残らないようにし、残った農薬は産業廃棄物として適切に処分します。
- ・使用済み容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど適切に処分する。市町村や地域等が共同で回収・処分している場合はそのルールに従い処分します。

## 2 水稲初中期害虫の防除について

### (1) イネミギワバエ（イネヒメハモグリバエ）の防除

主に老熟幼虫、一部は蛹で越冬し、羽化した成虫が移植後の稲に産卵します。産卵は水面に垂れて浮かんだ葉に多く行われるので、深植えや移植後の深水は産卵を誘発します。被害は沿岸部で多い傾向があり、5月下旬～6月上旬に急激に現れるため、防除が手遅れになりやすいので注意が必要です。

育苗箱施用剤を使用しなかった場合で産卵数が多い時は、茎葉散布剤や水面施用剤で防除を行います。

### (2) イネミズゾウムシ・イネドロオイムシ（イネクビボソハムシ）の防除

イネミズゾウムシは山林や畦畔等で越冬し、移植後に水田に侵入します。畦畔沿いに食害が多く、食害が激しい場合は生育が抑えられて減収します。育苗箱施用剤、育苗箱かん注剤、側条施用剤による防除は前年6月の食害株率が90%以上となった場合に行います。また、水面施用剤による防除は6月上旬に越冬後成虫が0.3頭/株（食害株率90%以上に相当）以上の場合に行います。

イネドロオイムシは早植えや生育がよい水田で産卵が多く、山間、山沿地や風当たりが少ない水田で被害が大きくなります。6月上～中旬に1株当たりの卵塊数が0.5を超える場合は茎葉散布剤で防除を行います。

### (3) イネキモグリバエ（イネカラバエ）の防除

山沿いや山間地での発生が多い傾向があります。被害が心配される地域やほ場では、グラントオンコル粒剤50g/箱を移植当日に処理するか、リディア箱粒剤50g/箱を移植3日前～移植当日に処理し防除を行います。

### (4) フタオビコヤガ（イネアオムシ）の防除

多肥田や葉色の濃い水田で発生が多くなる傾向があるので注意します。第2、第3世代幼虫による被害が局部的に多発することがあります。前年多発したほ場では育苗箱施用による防除を選択してください。

### (5) 水稲初中期害虫防除の注意点

#### ①薬剤選択の注意点

- ア. 県内では沿岸部を中心に薬剤感受性が低下しているイネドロオイムシが分布していることから、カーバメート剤（RACコード：1A）、プリンス剤（RACコード：2B）、有機リン剤（RACコード：1B）を使用する場合は、イネドロオイムシの発生に注意しましょう。
- イ. 殺虫剤と殺菌剤を混合した育苗箱施用剤を使用する場合は、減量すると殺菌剤の効果が低下するため散布量は「50g/箱」とします。

#### ②フタオビコヤガ防除の注意点

育苗箱施用剤は前年多発したほ場で使用します。

## 3 斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ）対策の水田内除草について

本県の主要な加害種はアカスジカスミカメです。水田内にイヌホタルイ、シズイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエ類が多発するとアカスジカスミカメが水田内へ侵入し、繁殖するため斑点米被害が甚大になります。そのため、水稲除草剤の適正使用により水田内の除草を徹底しましょう。一発処理剤は代かき日から10日以内に使用（ただし、ラベルに記載された使用時期に従うこと）し、散布時は田面の高いところでも水深5cmを確保します。